

センター試験 国語 (本試験) 分析

全体概況 (現代文)

試験時間 国語全体で 80 分

| | | |
|---|----------------|--------------------------|
| 大問数・解答数 | 大問数：2 題 | 解答数：19 問 |
| 難易度の変化 (対昨年比) | ○ 難化 ○ やや難化 | ● ほぼ同じ ○ やや易化 ○ 易化 |
| 問題の分量 (対昨年比) | ○ 多い | ● ほぼ同じ ○ 少ない |
| 出題分野の変化 | ○ あり | ● なし |
| 出題形式の変化 | ○ あり | ● なし |
| 新傾向の問題 | ○ あり | ● なし |
| <p>総評</p> <p>評論については前年よりやや易しくなった。小説については昨年より難化している。特に小説では、複数の出来事が列挙されているために、単純な本文照合では正解に迷う選択肢がいくつか見られた。小説においては、事実関係の正確な把握が求められており、選択肢の判断に苦しんだ受験生も多かったのではない。</p> | | |

大問別分析 (現代文)

| 大問 | 出題分野・テーマ | 配点 | コメント |
|-------|---------------|------|--|
| 第 1 問 | 木村敏「境界としての自己」 | 50 点 | 生命空間における個体と環境の境界について考察した評論文。個体と集団それぞれの場合における境界の確定のしがたさを論じたうえで、後半は特に人間の自己意識と自他の境界とのかかわりを述べ、生命の営みはすべて境界という形をとると結論づけている。本文の論旨はどちらかといえば難解であるが、各設問の選択肢は判別しやすくつくられており、そのために前年よりも易くなった印象である。問 2～問 5 までの設問すべてに指示語が絡んでいる点が特徴的である。 |
| 第 2 問 | 井伏鱒二「たま虫を見る」 | 50 点 | 短編小説の全文が出題された。ストーリーらしいストーリーがなく、主人公である私の「悲しいとき」の状況と「たま虫」との関わりをめぐる複数のエピソードで構成されている。設問は各エピソードごとに用意されており、それぞれのエピソードの部分読解で対応できる。心情を直接的に汲み取ることは難しいが、事実関係の正確な把握で正解が選べる。 |

センター試験 国語 (本試験) 分析

全体概況 (古典)

試験時間 国語全体で 80 分

| | |
|---|--|
| 設問数 (解答数) | 古文：6 問 (8 問) / 漢文：7 問 (9 問) |
| 難易度の変化 (対昨年比) | 古文：○ 難化 ○ やや難化 ○ ほぼ同じ ● やや易化 ○ 易化 漢文：○ 難化 ○ やや難化 ● ほぼ同じ ○ やや易化 ○ 易化 |
| 問題の分量 (対昨年比) | 古文：○ 多い ○ ほぼ同じ ● 少ない 漢文：○ 多い ● ほぼ同じ ○ 少ない |
| 出題作品ジャンルの変化 | 古文：○ あり ● なし / 漢文：● あり ○ なし |
| 出題形式の変化 | 古文：○ あり ● なし / 漢文：● あり ○ なし |
| 新傾向の問題 | 古文：○ あり ● なし / 漢文：● あり ○ なし |
| <p>総評</p> <p>古文の文字数が大幅に減少し、時間的ゆとりを持って解答できたと思われる。古文・漢文とも語句や文法・句形などが例年より易しい文章で、確実に現代語訳できたはずである。</p> <p>「古文」は文章自体が易化したため、古文は、例年より平均点が上がると予想される。ただし、内容重視の設問となり、知識偏重で学習してきた受験生を惑わせる選択肢となっている。</p> <p>「漢文」は設問数が増えているが、書き下し文に関する設問が2問に分かれただけで、解答数は変わらない。2005 年以前の「国語 I」の範囲で出題されていた「内容に関する空欄補充問題」が復活した。</p> | |

大問別分析 (古典)

| 大問 | 出題分野・テーマ | 配点 | コメント |
|-------|--|------|---|
| 第 3 問 | 古文「真葛がはら」 (「(天) 十一、一絃琴の詞」の全文) ※近世・説話 | 50 点 | <p>昨年の約 1900 字から約 1100 字へと 800 字程度減少した。2006 年本試験以来の近世作品からの出典である。近世の文章の特徴として、過去の助動詞「き」と「けり」の混在、古語が現代語と同意で用いられている例など、普段の「古文学習」の知識では混乱する部分もあるが、文章自体は読みやすい。センター試験の特徴であるが、本年度も文章の中に場面転換があり、段落ごとに内容を考えていかないと、後半で話の筋がわからなくなる危険性がある。</p> <p>問 3 以降は、文章全体の読解吟味力を問う設問で、「古文」の文法や単語など知識だけでは解答できない。傍線部とその直前・直後のみにこだわって考えた受験生は、選択肢にまどわされてしまったのではないか。また、問 5 では和歌の解釈問題が復活した。選択肢の吟味を含み、国語の総合読解力が問われた出題である。</p> |
| 第 4 問 | 漢文「西よ瑣録」 ※「よ」は「余」の下に「田」の文字 | 50 点 | <p>昨年の 208 字から 215 字へと 7 字増加した。2000 年以降、例話と評言とで 3～4 段落構成の文章 (評論・随筆) の出題が続いていたが、本年度は、登場人物の発言の中に「寓話」が含まれている 1 段落構成の文章が出題された。文章自体に用いられている句形・語句は簡単で読みやすい文章であるが、会話文の中に「寓話」が引用されていることに気付かなければ、後半を難解に感じた生徒がいると思われる。問われている句形・語句も基本的な知識で解答できる。問 7 では「寓話」の引用意図を推測させており、主旨・主張に関する設問が出題されていることは例年と変わらない。</p> |